公開資料

戦略的創造研究推進事業
（社会技術研究開発）
研究開発実施終了報告書

SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム

シナリオ創出フェーズ

「性暴力撲滅に向けた早期介入と PTSD 予防のための人材育成と社会システムづくり」

研究代表者　長江　美代子
（日本福祉大学看護学部　教授）

協働実施者　片岡　笑美子
（一般社団法人日本フォレンジックヒューマンケアセンター　会長）

目次

Ⅰ．本研究開発実施報告書サマリー 3
Ⅱ．本編 5

１．研究開発プロジェクトの目標 5
　１－１．研究開発プロジェクト全体の目標 5
　１－２．プロジェクトの位置づけ 6

２．研究開発の実施内容 7
　２－１．実施項目およびその全体像 7
　２－２．実施内容 9

３．研究開発成果 19
　３－１．目標の達成状況 19
　３－２．研究開発成果 19

４．研究開発の実施体制 21
　４－１．研究開発実施体制 21
　４－２．研究開発実施者 23
　４－３．研究開発の協力者 23

５．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など 26
　５－１．シンポジウム等 26
　５－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など 27
　５－３．論文発表 28
　５－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） 28
　５－５．新聞報道・投稿、受賞など 28
　５－６．特許出願 29

６．その他（任意） 29

Ⅰ．本研究開発実施報告書サマリー

・当初計画で掲げられた目標

シナリオ創出フェーズでは、導入として、愛知県内すべての性暴力被害者救援と、トラウマおよび PTSD 専門医療の拡充を目指す。同時に、性暴力に関する正しい知識と技術を持った人材育成と、性暴力を未然に防ぐことができる社会環境づくりに向けた啓発・広報活動を展開する。情報共有・意思決定支援システムと病院拠点型性暴力被害者ワンストップ支援センター（OSC）活動のデータの標準化・蓄積・分析基盤の構築により、長期的には日本国内への拡充を図り、速やかな性犯罪防止対策の具体化とエビデンスベースの実践が根付いた社会システムの構築により性暴力撲滅を目指す。

・主な実施項目と内容（当初計画、実施上で明らかになった困難・課題や、それへの対応・工夫）

A. 精神科アンケートを愛知県で実施し、PTSD診療の現状や精神科診療機関のOSCに対する認識などを把握することができた。精神科診療機関からのコメントから、今後の事業構想が具体的になった。個人や個別の施設で対応するのは困難であり、システムとしてトラウマ・PTSDの拠点センターが必要である。

B. 愛知県の事業との協働によるSANE研修が実施できたことで、県内のOSC設置可能病院の現状が把握でき、OSC設置に向けての現実的なプランへ反映させることができた。OSC設置に積極的なK病院に対して個別にサポートを開始した。取り組むことができる病院に焦点を当てて順番に導入することが現実的である。

C. MDTチームのデータ連係については、関連する機関の合意形成を確実にすることを優先し、具体的な既存ケースを土台に、今後のデータ共有にむけて情報共有シートを作成し、使用を開始した。現在、愛知県警にも同情報共有シートの使用についての参加を検討している。電話・ＦＡＸを基本とするコミュニケーションは連携の限界となっているため、デジタル庁など国レベルの対策を待ち、すぐに対応できるよう準備をしておく。

D. 性教育、トラウマインフォームド・ケア、OSC の理解など、啓発・教育・広報活動は、新コロナ禍で対面による働きかけの機会が制限され減少した。一方インターネットの活用がすすみ、遠方からのイベント参加が増えたことは、全国へのアピールの機会が増えた。今後は対面とオンラインのハイブリッドを基本として、活動を中断することなく進める。

・得られた主な成果（当初または実施中に設定されたＫＰＩの達成状況含む）

- 被害直後から中長期の性暴力被害者救援システム「NGM4S（NAGOMI for Survivors）救援システム」を構築し、OSC を拠点に拡充と他地域展開のシナリオは具体的になった。
- MDT 構築は途上ではあるが愛知県や名古屋市中央児童相談所との関係づくりができて、ソリューションへの足がかりとなった。
- 共有シートの作成とウェブベースの記録システムの整備ができた。
- 既存のなごみデータから、部分的ではあるが社会経済的影響および COVID19 の影響を把握でき、今後のデータ収集の方向性が示唆された。
- 地域内 PTSD 診療状況が把握でき、トラウマ拠点設置準備委員会が具体的に構成された。

・あれば、残された、あるいは新たな課題

本プロジェクトが取り組む社会課題は、性暴力被害、PTSD 発症、生活・社会不適応、再被害という悪循環である。性暴力被害の多くは見逃されており、実際の被害発生数は不明である。解決策として以下の 4 項目を中心に取り組んだ：A.トラウマ･PTSD 対応、B.OSC 造設と拡大、C.MDT とデータ連携、D.啓発･教育。いずれの項目にも、制度化、暗数の低減、社会的認知強化、性教育強化、情報化・数値化に焦点をあてた活動を組み込んだ。防災、救急医療、社会的経済的影響といった観点を導入し、必要であればあらたな制度をつくることも視野に入れた。さらには共同実践者の可能性を探りつつ、仕組みや制度を超えて全国展開するシナリオとした。

OSC 増設と拡大は、愛知県性犯罪・性暴力被害者支援事業との協働により、県内 24 の救命救急センターを連携センターとして SANE を配置した急性期対応モデルを導入し、「なごみ」をハブとした連携モデルとして活動を定着させ拡充をスムーズにする計画が、ほぼ順調にすすんでいる。しかし、OSC で受け入れた被害者を迅速に適切な支援につなぐための MDT の実働は、情報共有の合意形成においてプライバシーと個人情報保護の問題解決が困難であり、途上にある。また、救援後のトラウマ･PTSD のケアおよび治療については、専門家不足に加え、PTSD 治療実施を困難にしている日本の診療体制の問題があったため、トラウマ・PTSD 拠点設置計画を進めている。研修や治療のための財源確保の課題があり、助成金や補助金の確保に努めるとともに、NFHCC で治療セラピーについて県や市からの委託を受けることは継続的に活動を支える資金源につながると考えている。

「なごみ」データでは、COVID19 の影響を受けた 2020 年は 2019 年と比べて、大学生以下の子どもの「家族からの被害」の割合が大幅に増えていた（26.3%→43.2%）。さらに「なごみ」来所者の半数は背景に DV があった。DV・虐待・性暴力は常に絡み合って起こっているが見落とされている。大きな課題となっている縦割り行政の窓口を統合することは暗数の低減につながる。愛知県主動の協議会を構成しこの課題に取り組む計画を追加した。研修による支援機関や関連スタッフの縦横のラインの交流についても計画に組み入れた。自分で支援につながらない 18 才未満の子どもたち（本人の来所は 1%以下）にアウトリーチできる方法を模索中である。

身体的・精神的影響は医療カルテやトラウマ・PTSD のケアや治療面接の既存のデータ項目を基本に検討するとともに、ウェアラブルデバイスにより被害者の PTSD を可視化する試みを開始した。5 年間の「なごみ」のデータ分析では、性暴力被害とフラッシュバック、リストカット、希死念慮、自殺との関連が示された。社会経済的影響については、人口における被害者の割合となごみのデータを合わせて推計することで、社会で発生している経済的ロスを示す計画である。

Ⅱ．本編

１．　研究開発プロジェクトの目標

本プロジェクトが取り組む社会課題は、性暴力被害、PTSD 発症、生活・社会不適応、再被害という悪循環である。性暴力被害の多くは見逃されており、実際の被害発生数は不明である。見逃されている理由としてあげられるのは、①被害者は誰にも言わない、相談する場所も知らない、相談する場所が不足、②研修を受けて適切な知識を持っているスタッフが不足、③情報システムの不足で迅速な関係組織間の情報共有・機動的連携が不調、④エビデンスに基づく政策決定(EBPM)に活用するデータがないために制度普及が不足、⑤直接収益につながらないと言う経営者の視線、などである。性暴力の被害者は、社会に根強く存在する偏見のため二次被害を受けやすく、被害者のおよそ半数が心的外傷後ストレス障害(以下 PTSD)を発症する。PTSD に特徴的なトラウマ記憶は、物事や行動の解釈や問題解決への認知反応を歪めるため、社会生活を妨げる。適切な支援が得られないと問題は長期化し、人間関係の悪化、失職、生活困難、慢性的健康障害、再被害、貧困の悪循環に陥る。PTSD の病理は次世代に及び、その治療は喫緊の課題であるが、PTSD 治療を提供する医療機関もスタッフも僅少という現状がある。

１－１．研究開発プロジェクト全体の目標

シナリオ創出フェーズでは、導入として、愛知県内すべての性暴力被害者救援と、トラウマおよび PTSD 専門医療の拡充を目指す。同時に、性暴力に関する正しい知識と技術を持った人材育成と、性暴力を未然に防ぐことができる社会環境づくりに向けた啓発・広報活動を展開する。長期的には日本国内への拡充を図り、将来的には速やかな性犯罪防止対策の具体化とエビデンスベースの実践が根付いた社会システムの構築により性暴力撲滅を目指す。

- なごみグループは、愛知県との協働により、性暴力被害者支援看護師（SANE)を配置した病院拠点型 OSC を複数開設し、なごみをハブとしてモデル化し、他地域へと展開していく。国連推奨の女性 20 万人に一か所の OSC を目指す。愛知県人口 730 万人に対し、35 箇所設置を目指し、すべての被害者を救済する（Backcasting）。
- 研究グループは、なごみの活動に関わってトラウマ治療専門家の育成と体制づくりをし、被害者の社会復帰を支援する。技術シーズとして、PTSD 長時間暴露法（PE）を用いて継続的に治療提供できる環境づくりをする。すべての被害者を拾い上げ、PTSD の予防・治療・回復へ確実につなぐことで、次世代への連鎖を断ち切る。(Outside-in)。
- データサイエンス支援グループは、データベースとネットワークを構築し MDT(メンバー様式 C-2 参照)によるデータ連携を実現させる。MDT を支援する情報共有・意思決定支援システムおよびデータの標準化・蓄積・分析基盤を検討する。治療効果や症状に関するデータベースを作成し、ＰＥ治療や支援プランなど、ICT（データ共有、電子会

議体）を活用しデータに基づきアウトカムを設定・評価・修正し課題の解決に向かう（Solution driven）。

・ 啓発・教育・広報活動及び人材育成については、3 グループが共同し、シンポジウムやワークショップを開催し、継続的に多分野にはたらきかける。

１－２．プロジェクトの位置づけ

本プロジェクトが取り組む社会課題は、性暴力被害、PTSD 発症、生活・社会不適応、再被害という悪循環である。その解決策として、A.トラウマ／PTSD 対応、B.OSC 拡充、C.データ連係、D 啓発・教育活動、を 4 つの柱とした。内閣府が示した R2 年度～4 年度の集中強化期間の性犯罪・性暴力対策 5 項目は、この 4 つの柱とほぼ一致（法制度以外）しており、社会実装を実現できる可能性は高い。

A. 精神科の協力については、約 30 箇所の精神科診療機関が施設または個人として協力できる。個別に協力を得つつ、これらの精神科診療機関、精神科医、臨床心理士でトラウマ・PTSD 拠点を設置することを目指す。防災の観点からもアピールできる。

B. OSC 拡充については愛知県との協働で SANE 育成とともに進める。救急医療では性暴力を含めてあらゆる暴力の対応が必要であるため、SANE の活動を広げ社会の認知をえるためにも、救急医療学会との連携を活動に取り入れる。ネブラスカチームとの collaboration は継続している。具体的なアプローチを検討中である。

C. 具体的になごみの活動のプロセスを点検し情報化できるところが明確になりつつある。MDT メンバーを少しずつ加えていき、MDT 内の情報交換システムを形成する。

・ なごみの来所者データや PTSD に関するデータが蓄積され、分析を経て性暴力被害を予測できるようになれば未然に防ぐことにつながっていく。また暗数の多い性暴力被害の母数を推定することができる。さらに、病院拠点型 OSC の強みと改善点の根拠をもって提案できる。

・ なごみのデータから、18 才未満の被害者の 85%は、本人以外からの電話連絡により支援が開始されていた。さらに、連絡があったケースのうち本人が来所できたのは 1%であった、周囲の大人につながらない限り、自分で支援につながらない 18 才未満の子どもたちにアウトリーチできるスマホアプリの開発を検討している。導入された全国共通短縮番号の活用も含めている。

・ 情報共有シートを活用した児童相談所、警察署、なごみの連携が軌道に乗ったところで、データ連携を具体的にできる。まずは愛知県内で MDT が共有できる安全なデータ連係のためのラインを具体的にすることも検討している。

D. 性教育、トラウマインフォームド・ケア、OSC の理解など、啓発・教育・広報活動は、W オンラインと対面のハイブリッドを基本にして実施する。

２．　研究開発の実施内容

２－１．実施項目およびその全体像

A.　トラウマ治療専門家を育成し、組織や体制づくりをして，継続的な治療を提供する環境を整える。

A-1　性暴力被害者のトラウマケアおよび治療について全国の精神科関連機関にアンケートを実施し、協力機関一覧を作成する。

A-2　トラウマおよび PTSD ケア拠点を整備する。同拠点では、すべての個人とその家族に対して、トラウマ・PTSD の予防・治療・回復に向けての相談･支援・治療体制を構築するとともに、治療ケアに従事するタッフの育成を行う。

B.　すべての性暴力被害者を救援するに足るワンストップセンターを適正数確保し、救援から回復までの総合的支援を提供する環境と人材の育成がシステムとして定着させる。

B-1　病院拠点型 OSC を適正数確保し、すべての性暴力被害者が適切な支援につながることができる。
令和３年３月末までに地域内救急救命病院 1～２箇所に SANE を配置し性暴力被害者急性期ワンストップ支援センター（以下連携 OSC）を開設する。

B-2　日本救急医学会との対話を始め、SANE の役割を明確に示すことで、その活用を促進する。

B-3　救援から回復までの総合的支援活動継続のための環境と人材育成がシステムとして定着する。

C.　見落とさずに適正な支援・治療につなぐ MDT によるデータ連携を実現し、性暴力被害の現状および被害が与える身体的･精神的･社会的・経済的インパクトを可視化するためのデータ収集・分析環境構築する。

C-1　拠点病院院内なごみグループと多職種・多機関の代表者による MDT 準備状態を、常時対応可能な MDT へ体制を整え、MDT が迅速なアセスメントと決断により適正に対応するために組織間でのデータ連携に必要な項目を明確にする。

C-2　AiCAN 導入にむけたデータベースの作成と応用プログラムの開発。

C-3 トラウマケアおよび PTSD 治療を実施し効果を評価しデータベース化するとともに、社会の理解を得るために、性暴力被害の影響および PTSD 症状の可視化を試みる。令和元年 11 月～継続（A 項目より）。

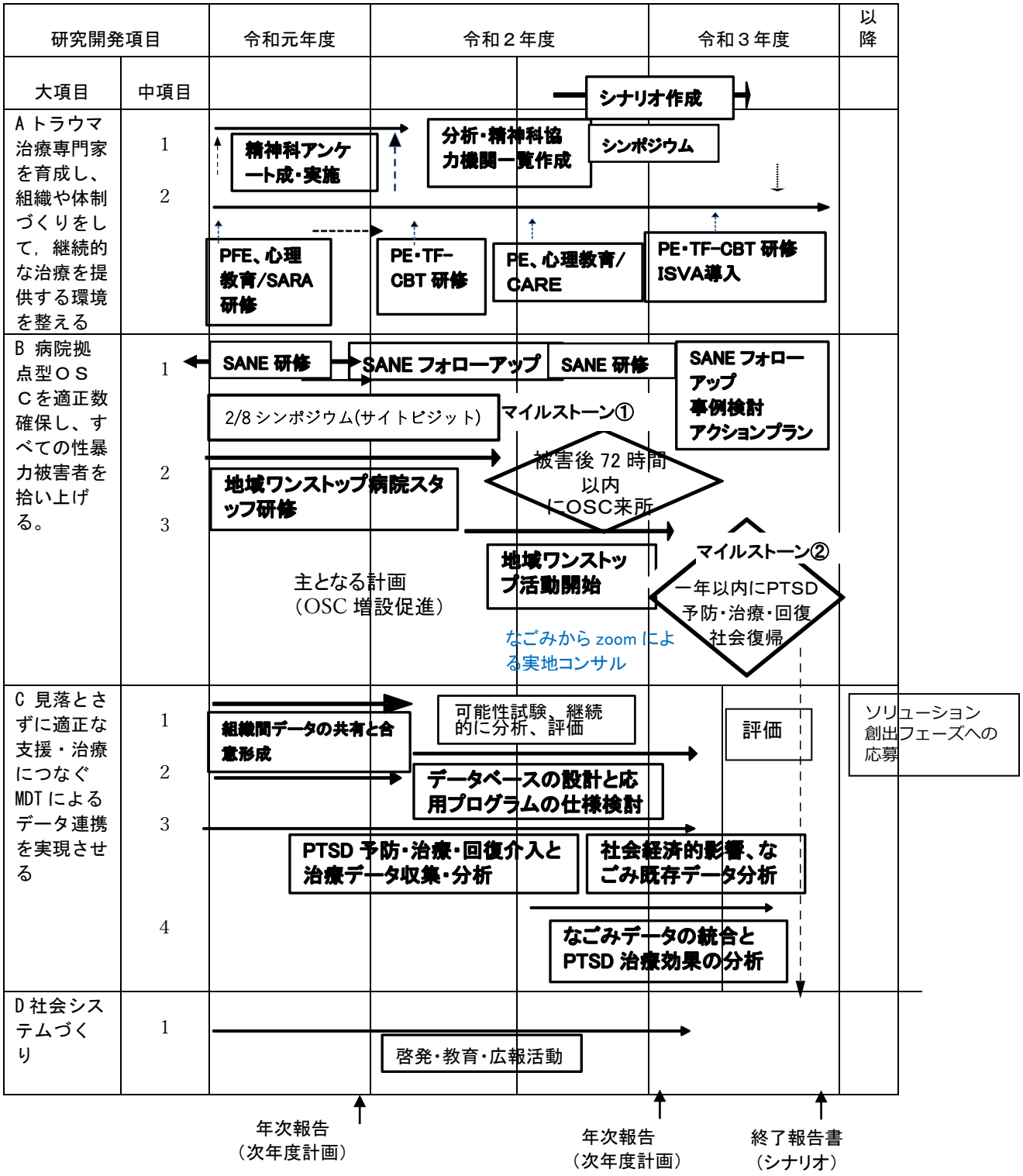
C-4 地域ワンストップ設置病院（連携センター）で受け入れた被害者のデータ収集を「なごみ」のデータに統合し、急性期３ヶ月の対応と PTSD 発症について分析する（B 項目より）。

D.　啓発・教育・広報活動を通じて性暴力を未然に防ぐことができる社会システムづくり

一般社団法人日本フォレンジックヒューマンケアセンター（NFHCC）を立ち上げ以下の活動に取り組んでいる。

D-1　啓発・教育・広報活動性暴力が医療的・社会的・政治的・経済的問題であることを伝える。

研究開発期間中（24 ヶ月）のスケジュール



２－２．実施内容

実施項目 A-1：愛知県の精神科診療機関にアンケートを実施

(1) 内容・方法・活動：

2020年6月～2021年10月（愛知県における実施）アンケートを実施し、報告書を作成した。

愛知県内精神科診療機関のうち325施設に郵送し、109の施設および専門職（個人）より回答を得た（回収率29%）。

全国各地での実施に向けて、Web版アンケートを作成した。

(2) 結果：

愛知県内 109 精神科診療施設より得た回答であり、愛知県全体を反映しているとは言えないが、回答施設/回答者の 27%は現在性暴力被害者を診ている一方で、28%はこれまで診ていなかった。PTSD の診療についても 26%が PTSD 治療は実施していないと答えた。ランダム比較試験でエビデンスが確立された治療法であるトラウマに焦点を当てた認知行動療法を基盤とした PTSD 専門療法について実施しているのは 6%(7 件)であり、各地の OSC が、PTSD に対する介入が必要な被害者のつなぎ先に苦慮している現状を反映していた。

愛知県内で協力を申し出た機関 32 カ所の一覧を作成した。

(3) 特記事項：

PTSD 治療実施困難の背景には、日本の診療体制の問題があり、個々には協力したいという思いが表明されていた。

アンケートを全国一斉は難しく、時間をかけて 1 都道府県毎に実施していくこととなった。

実施項目 A-2：トラウマケアおよび治療専門家を育成する。

(1) 内容・方法・活動

- PCIT（親子交流療法）５日間イニシャルワークショップ実施した（令和元年 12 月 6 日、7 日、8 日、14 日、15 日：日本福祉大学東海キャンパス）。
- CARE （大人と子どもの絆を深めるプログラム)を日本福祉大学看護実践研究センターの公開講座として実施した（1～2 回／年、30 名／回）施設単位での依頼にも対応し、5 回実施した。
- 2 名の臨床心理士がなごみで性暴力被害者対応の研修を開始し、PTSD 暴露療法（PE）のスーパービジョンを経てなごみ利用者に実施できるようになった。
- ISVA((Independent Sexual Violence Adviser)という UK 認定の性暴力に関する実践的なオンライン支援者研修の導入を、当事者団体代表を含む全国的なメンバー5 名（東京、福岡、名古屋）で実施した（2021 年 9 月 26 日）。

  目的：日本にイギリスの性暴力被害者支援のシステム、および ISVA という資格を紹介し、日本への ISVA 導入を促進する。ISVA はどのような役割を担ってい

て、その役割はどのように重要なのかが日本に紹介されることで、性暴力被害者支援において重要な観点、支援者が身に着けておくべき知識や技術などが明確になる。

- 米国ペンシルバニア大学不安治療研究センター(CTSA：所長 Edna Foa 氏）よりシンポジストを招致し公開シンポジウムの予定であったが、オンラインによる NGM4S プロジェクトの紹介シンポジウムに切り替えて実施した（2021 年 5 月 29 日）

  目的：ＮＧＭ４Ｓプロジェクトの性暴力撲滅に向けた取り組みについて、社会に向けて発信し、今後の全国展開への足がかりとする。

(2)結果

- PCIT（親子交流療法）基礎研修修了後、看護師、臨床心理士、公認心理師、精神科医師、がセラピーを開始した、さらに PCIT 施設内トレーナー（WAT）3 名認定されたことで、今後は PCIT セラピストの養成が可能になった。CARE のファシリテーターは、PCIT 基礎研修を受けている必要がある。

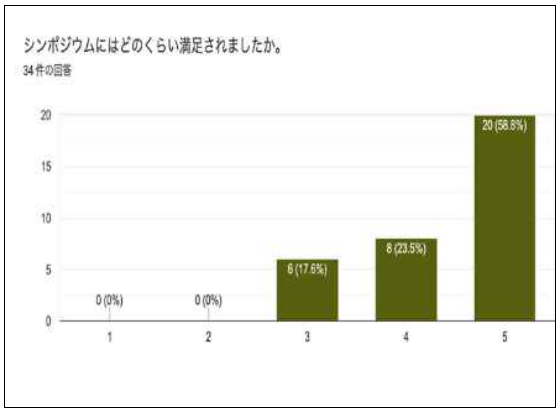
  NFHCC セラピーグループの PCIT セラピストは現在 10 名、PCIT WAT トレーナー 4 名,CARE ファシリテーター7 名である。

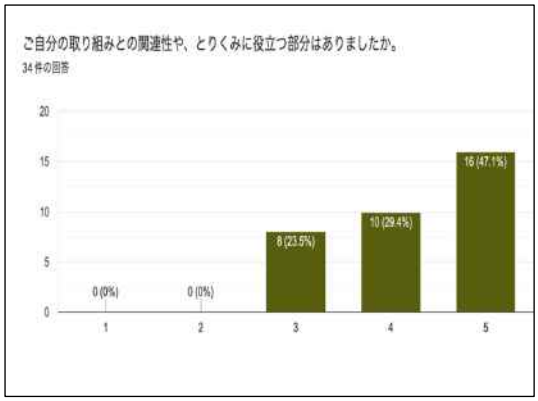
  - インターネット PCIT を含めて PCIT を 10 親子／年間、CARE2 回（合計 50 名の専門職対象）実施
- 研究代表者が PE コンサルタントの認定をうけたことと、PE 研修を受けた臨床心理士 3 名がなごみで心のケアに関する活動に加わったことで、セラピー活動を拡大した。
  - 年間延べ 220 回(実数 50 名)のトラウマケアを含む個別対面面接を実施（年々増加傾向）
- PE については武蔵野大学と連携してオンラインで PE を実施できることになったため、なごみで PTSD の認知行動療法（TF-CBT）ができるように時間を設定した。セラピー実施は年間　PE2 名、TF-CBT3 名

- **シンポジウム「性暴力撲滅に向けてエビデンスを蓄積する」アンケート結果**

96 名参加、34 名の回答が得られた。

回答者の職種の約半分は、健康・医療・福祉分野で、80%以上が女性だった。全体的に、82%が「満足～とても満足」と回答し、77%が「自身の取り組みに役立つ～とても役立つ」と、概ね高い評価をいただいた。今後の企画についての期待の声も多かった。自由記載のコメントも多数あった。





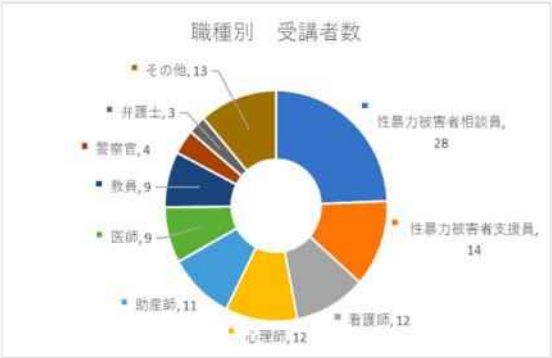
＜自由コメント抜粋＞

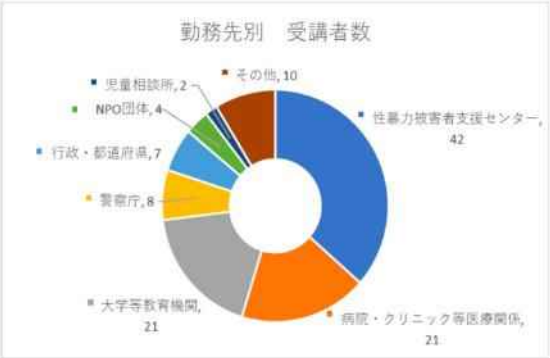
- 枠組みや法制度の大きな話から、支援提供体制の構築と支援の実状が良くわかる発表で良かった。
- 国の動きは聞く機会がなかったので、刑法改正の検討について、最新情報を得てアップデートできた。
- 本当の意味でのワンストップの必要性を感じ、取り組む姿勢に感銘を受けた。
- システムについては素晴らしい。なごみモデルの構築はこれからの社会に必須。
- 関連機関との情報共有に付いての取り組みがとても興味深かった
- 各機関との協同により、被害を受けた方の負担が少しでも軽くなることを祈りたい。
- ワンストップセンター、児相との連携にあたって言葉を統一するというのは、今まで考えたことがなく、勉強になった。どこの地域でも情報共有が出来ればいいと思うので、規程の改訂または情報共有をする調印を結べればよいと思う。
- NGM4S 情報連携に向けて一歩ずつ進んで欲しい。
- PE や PICT など治療がワンストップでできることに驚きました
- PTSD 予防の方法について確立されており、実際に行われていることを知った。
- 大切な活動なので、もっと知られるように、私からも伝えていきたい。
- AI での補完という着想は面白いと思った。ただ、情報基盤の整備や AI の活用を通して、どのような人材育成につなげられるのかわかりにくい。
- 情報の専門家が関与していることを知りなるほどと思った。ただ、シンポジストも指摘していたようにアナログで充分対応できていると思っているところにどうやって IT のメリット(デメリット)を理解してもらい意義を見出すかは、今後の研究成果を注視したい。

- ISVA 日本ワークショップ～イギリスに学ぶ性暴力被害者支援～　アンケート結果

参加者 115 名中 70 名から回答があった。71%(50 名)がとても満足と回答した。自由記述欄には、「ISVA の活動、役割、意義について知ることができた」、「警察や裁判所等との連携が素晴らしいと思った」、など多数のコメントがよせられた。
次のステップとなる 16 名定員 ISVA 研修(40 時間)には、30 名が応募の意志を示した。

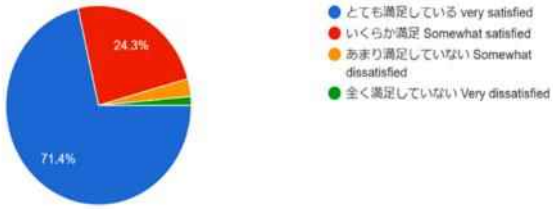
受講者数　計115名
〈内訳〉





【アンケート回答】

1. 全体的に、今日のワークショップはどれくらい満足のいくものでしたか？Overall, how satisfied are you with the session?
70 件の回答



〈内訳〉

とても満足している	50人
いくらか満足	17人
あまり満足していない	2人
全く満足していない	1人

＜自由コメント抜粋＞

- イギリスにおける性暴力被害者支援についての取り組み、制度等を知ることができた。
- イギリスでの実践根拠が NHS であると知れて良かった。
- 保険制度でのプログラム、システムであることはエビデンスもしっかり取っている内容なのでもっと知りたいと思った。
- 日本とイギリスの性被害者の置かれている立場が良く分かった。
- 日本の課題としては、関係機関(特に警察)との連携が大きな課題だと思う。

- イギリスの性被害者の捉え方の幅広さ、サバイバーのニーズを第一にしていることを理解できた。
- イギリスは国レベルで性暴力被害者の支援を行っているということ。
- ISVA の活動、役割、意義について知ることができた。
- 警察や裁判所等との連携が素晴らしいと思った
- 国の保険制度の一環として支援が行われていることが分かった。
- 独立したポジションで活動できていることが知れた。日本でも広がってほしい。
- 被害者が専門的な支援を継続的に受けられる、良いモデルだと思った。
- どこの ISVA でも同じレベルの支援が受けられるということ。
- アセスメントや支援計画がしっかりしているところ。
- 相談支援員の質の維持・向上がなされていること。
- ウェビナーだからこそ、現地の話が聞けたと思う。

(3)特記事項：

COVID-19 の影響により、以下の対面集団研修は開催できなかった。

- 「なごみ」SANE フォローアップ研修「トラウマ症状に対する心理教育、心理教育アプリ SARA の活用」、PTSD 暴露療法（TF-CBT）研修、「なごみ」アドボケーター研修（PFA による被害直後の危機対応）が開催できず、オンライン開催可能な研修やシンポジウムで対応した。

実施項目 B-1：病院拠点型 OSC を適正数確保

(1) 内容・方法・活動：

令和元年より、愛知県性暴力・性犯罪被害者支援事業との協働により、県内 24 箇所の救急救命センターを OSC 連携センター候補として、所属看護師 SANE 受講を推進している。

SANE 養成研修（全 8 日間、64 時間）は、日本福祉大学の科目履修プログラムとして毎年実施できるようになった。

日本フォレンジック看護学会と協働で、学会認定制度（SANE-J）を推進し、2019 年より認定試験を開始した。

「なごみ」では、SANE 受講者に対して、事例検討参加を促し、被害者対応の相談やワンストップ設置のコンサルテーションを提供している。

(2) 結果

- SANE 受講生は毎年約 30 名であり、3 年間で愛知県内 24 救命救急センターのうち 18 センターから 69 名の看護師が受講した。
- 2 病院から、急性期に対応できる OSC 設置の意志が示された。
- 日本フォレンジック看護学会 SANE-J 認定試験が 3 回実施され、106 名の SANE-J が登録されている。

(3) 特記事項：

COVID-19 の影響により、以下の対応とした。

- SANE は全面オンラインで実施した。

- 地域OSC設置病院は、愛知県と検討の上、今後は「連携センター」とした。

実施項目 B-2：救命救急分野との連携推進

(1)　内容・方法・活動

- 米国ネブラスカ大学メディカスセンター救命救急部門のチームを招致し、救命救急における性暴力・DV・虐待対応の重要性と SANE の活動について特別講義とシンポジウムを対面で開催した。
  対象：病院と SANE 受講生その他（参加者：午前 SANE36 名、午後一般を含む 30 名）2020 年 2 月 8 日
- 日本救急医学会学術集会（岐阜 2020 年 11 月 18-20 日）はオンライン開催となり、ポスター発表した。

(2)　結果

- 米国ネブラスカ大学メディカスセンター救命救急部門チームとのコラボレーションは継続的になり、シンポジウム、研修、アプリ開発など具体的な計画が進んでいる。
- 日本救急医学会に性暴力部門ができ、オンラインでミーティングの機会を持った（2021 年 10 月 19 日）

実施項目 B-3：救援から回復までの総合的支援活動継続のための環境と人材育成がシステムとして定着する。

(1)　内容・方法・活動

- なごみハブとした連携 OSC モデル」の実働をめざして、連携センターとして急性期 OSC 設置を目指す病院からの、被害者対応のコンサルテーション、現地訪問、なごみ事例検討会への参加を開始した。
- 目標管理として、現状分析・目標設定・実践（PDCA サイクル）し評価修正できるよう、SANE 研修内で各連携センター候補病院のアクションプランの立案と発表を組み込んだ。
- OSC を支える地域内の救急救命センターとそこに配置される SANE の育成が定着し予算が確保できるよう、県との交渉を進めた。

(2)　結果

- 連携センター候補病院 24 のうち 18 病院から SANE 研修に参加しており、10 病院が 2 回以上継続して所属看護師を研修に参加させている。アクションプランの立案が定着し、発表会が継続され、2 病院が具体的に急性期対応 OSC を設置する計画を進めている。
- なごみ事例検討会には、連携センター候補病院の SANE 修了生 10 名程度が、毎月オンライン参加している。

(3)　特記事項

- 新型コロナの広がり状況をみながら、できれば現地訪問、なごみでの研修を実施して、OSC 導入を進めたいが、現在ではまだオンラインに留まっている。

実施項目 C-1：常時対応可能な MDT へ体制を整える

(1)　内容・方法・活動

- 「なごみ」内のデータのみを使ったデータ項目・分析を実施し、MDT情報共有シートを設計し、児童相談所、警察、「なごみ」間で、紙ベースでケースについての情報共有を開始した。
- JSTのサポートを受け、北九州三者同居制度について、京都産業大学田村先生とのZOOM会議により連携機関の同居制度の可能性について検討した。(2020年11月16日)
- JSTのサポートを受け、児相、警察、検察、弁護士、医療従事者、ソーシャルワーカーなどを対象とした司法面接研修について、立命館大学の仲先生とのZoom会議により、多職種多機関の現場の共有と合意形成について検討した。（2020年12月14日）
- NGM4S プロジェクトと名古屋市児童相談所との連携の今後についてミーティングの機会を持った。（2021 年 3 月 5 日）

(2)　結果

- なごみと名古屋中央児童相談所の定期的な MDT ワーキングで、対応困難な事例について、事例毎のフォームを作成できるようになった。

(3)　特記事項

- デジタル化が進むまでは、データ連係はまだ難しい。

実施項目 C-2：AiCAN 導入にむけたデータベースの作成と応用プログラムの開発

(1)　内容・方法・活動

- なごみの業務に沿ったウェブベースのケース情報入力管理システム(ただし、現在はスタンドアロン運用)を構築した。
- 上記ウェブベースのケース情報入力管理システムについて、SANEなどによる実用試験、および、改良点の抽出、ならびに、アジャイルスタイルで改良を進めた。

(2)　結果

- 上記ウェブベースのケース情報入力管理システムについて、C-1で報告した組織間データ共有に用いているMDT情報共有シートと入力項目を共通化させ、電子ベースの組織間連携が開始された際に向けた試作ソフトウェアとした。

(3)　特記事項

- COVID19 の影響で対面での話し合いがすすまないこと、個人情報保護の対応について時間がかかることが予測され、合意形成プロセスがすすまないこと、などから、期間内に AiCAN 導入は困難と判断されたため、基本的な計画の見直しが必要となった。

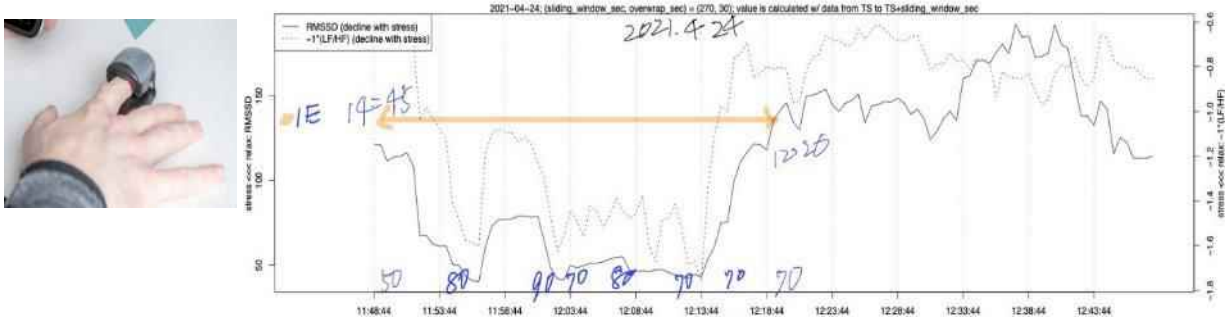
実施項目 C-3：PTSD の可視化とトラウマケアおよび PTSD 治療効果の評価

(1)　内容･方法・活動

- PE 治療の記録を集積するための C２における入力システムの設計･構築を完成させた。
- ウェアラブルデバイスによる PTSD 症状と治療効果の可視化を試行した
  具体的には、本プロジェクトの普及対象コア技術である PE 治療の平易な利用の実現に向け、新たに到達点を設定した。新規に開始した PE 治療セッションにおける HRV ベース指標によるストレス状態評価を開始した。
- なごみの 5 年間の既存データを分析し性暴力被害の社会的経済的インパクの可視化を試みた。

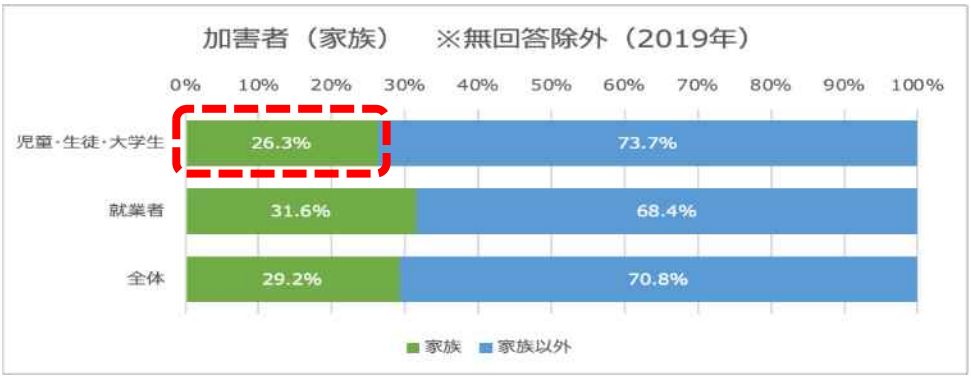
(2)　結果

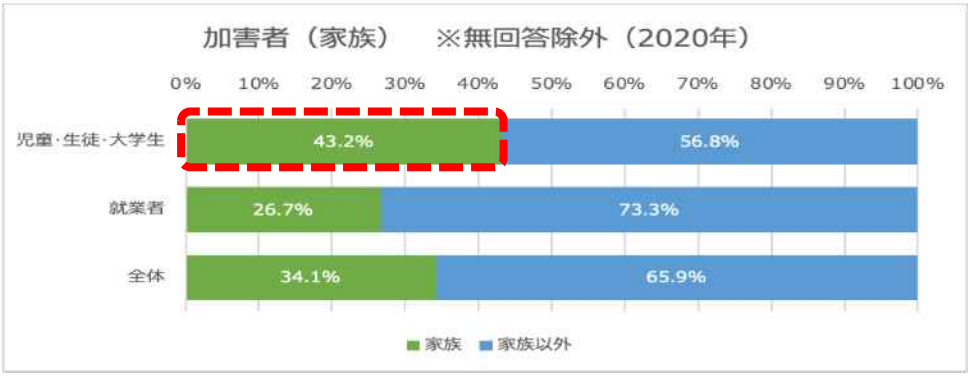
- ウェアラブルデバイスによる心拍変動とストレス状態測定において、PE 治療施術者による主観評価と一定の関係性が認められた。以下の図は、PE 治療セッション中の HRV ベース指標であり、ストレス負荷(暴露)により数値が低くなる。その後の関わりからセッション終了に向けてストレスが改善していることが分かる。合計 21 セッションのデータが収集されており、今後も収集を継続的する。



- **以下の既存なごみデータ分析結果から、今後収集が必要なデータ項目の手がかりがあった。**
  - ➢ 来所までの時間が長くなるほどフラッシュバックに苦しめられる傾向がある。
  - ➢ 生徒／学生ですでにリストカットなどの経験があるほど来所が遅れる傾向がある。
  - ➢ 就業者では、２極化しており、７２時間未満の来所とともに来所までの時間が長いところで希死念慮や自殺企画が多い。
  - ➢ 特に就業者（年齢が高い層）で、被害を受ける以前にすでに精神科にかかっているケースが多い。（すでに性被害を受けていて（PTSD）に苦しんでいる女性が再度被害にあいやすい。）

- COVID19 禍の 2020 年は、2019 年に比べて「家族からの被害」割合が大幅に増えていた。（26.3→43.2%）





- COVID19 禍の 2020 年は、2019 年に比べて SNS での被害も目立っている。
  - SNS による被害は、児童・生徒・大学生で 8.2%、就業者 5.3%、全体で 6.7%増えている。
- COVID19 禍の 2020 年は、DV、暴力は 2019 年よりそれぞれ減少している。
  - 相談窓口の相談件数は増加している中で、外部とのつながりが難しく、一人で抱え、来所できない状況や経済的困窮者が増え、来所をためらっている現状が伺える。

実施項目 C-4：地域ワンストップ設置病院（連携センター）で受け入れた被害者のデータ収集を「なごみ」のデータに統合

(1)　内容･方法・活動

- なごみをハブとした活動はまだ開始できていないため、項目を検討している段階

(2)　特記事項

ISVA 導入には,全国的なメンバーである ISVA-Japan と内閣府が関わっており、性暴力被害に関する全国レベルのデータを集約できるように、定期的なミーティングと勉強会を開催し、協働で取り組んでいる。

実施項目 D-1：　啓発・教育・広報活動

(1)　内容･方法・活動

- 研修、講演、シンポジウム、大学講義、リーフレットの作成、メディアへの発信
- シンポジウムの資料や動画をHPにアップし、資料についてはダウンロードできるようにした。
- 現場での性教育教材の作成

(2)　結果

- なごみおよびNFHCCの活動として、教育施設、警察、行政など幅広い分野から講演やシンポジウムの依頼があり、現状と予防の大切さ、現状と合わない刑法を改正する必要性、教育現場との連携の必要性を訴えることができた。
- 被害者だけでなく、家族のケアが必要であること、被害者のPTSDの深刻さなどがメディアで取り上げられた。
- なごみ連絡推進会議メンバーに、教育委員会と薬剤師会が加わり、連携の幅が広がった。
- 大学の講義としての依頼が徐々に広がってきた。
- 現場で使う被害を受けた子どもへの心理教育用絵本、子どもと関わる専門職ありは大人に向けての性教育絵本を作成した。

３．　研究開発成果

３－１．目標の達成状況

性暴力撲滅に向けて、OSC の拡大、トラウマ・PTSD の予防・治療・回復の支援、社会の理解と政策に反映するためのエビデンスなど、社会づくりと人材育成のためのシステムの土台と、全国展開に向けてのシナリオ構築はほぼ達成できた。サイトビジットや戦略会議を経てアドバイザーチームからいただいた助言と支援により、社会経済的なインパクトの調査、専門家育成の段階的研修の進め方、継続のための自律的運営など、今後の展開につながる示唆を得ることができた。

３－２．研究開発成果

成果：被害直後から中長期の性暴力被害者救援システム「NGM4S（NAGOMI for Survivors）救援システム」の構築。

(1) 内容：NGM4S 救援システムは①性暴力被害者支援看護師 SANE を配置した病院拠点型 OSC 急性期対応モデル、②システムの急性期救援効果を促進する地域の多職種・多機関連携チーム（MDT）体制モデル（試行中）、③中長期救援のためのトラウマ焦点化認知行動療法（TF-CBT）に代表される、エビデンスが確立した PTSD 治療技術、で構成される。

(2) 活用・展開：上記①②③は相互独立なモデルとして段階的に導入し協働することで、その地域に適した OSC を無理なく設置できる。このプロセス全体を段階的に各地域に適用し全国展開への可能性を確保する。

特に、なごみの実践で練られた①急性期対応モデルはシンプルなので導入しやすいため、まずは急性期のみの OSC としてスタートし、「なごみ」をハブとすることで導入と実践をスムーズにし、継続して段階的に発展させていくことができる。

(3)その他：MDT 体制づくりに苦慮したことから、そのプロセスそのものをモデル化することにした。

成果：愛知県における性犯罪・性暴力被害者支援について、支援機関の連携協力体制の推進が具体的になった。愛知県主導でなごみ、ハートフル愛知、愛知サポートセンターを含めた協議会が具体的に構成され、実働が開始されることになった。

(1) 内容：性暴力救援センター 日赤なごや なごみ、NFHCC、ハートフルステーション・あいち、（公社）被害者サポートセンターあいち、愛知県警察本部警務部住民サービス課犯罪被害者支援室、愛知県防災安全局県民安全課をメンバーとして、定期的に、各機関間の情報共有及び意見交換を図る。

- 愛知県における支援体制のスキームや方針の説明
- 医療費公費負担制度の運用状況
- 各支援機関における相談件数等の情報共有
- 県内救命救急センターにおける支援体制の状況

- SANE 養成プログラムの実施状況
- 各支援機関からの情報提供、意見交換

(2)活用・展開：縦割りになっている DV/虐待/性暴力の行政窓口に加わってもらうことで統合の道を探る。ISVA 研修による支援機関や関連スタッフの縦横のラインの交流や、各病院の OSC と子ども権利擁護チーム（なければ発足を促す）の統合などをプロジェクト計画に組み入れる。

(3)その他：児童相談所で一時保護された親子の背景は、DV・虐待・性暴力は常に絡み合って起こっているため、窓口を統合することが効果的に情報を届け介入できる。また性暴力被害の暗数軽減にも貢献できる。

成果：地域内 PTSD 診療状況が把握でき、トラウマ拠点設置準備委員会が具体的に構成された。

(1) 内容：トラウマ・PTSD　拠点準備チームのメンバー候補 8 名とリーダーは決まっている。拠点では、相談、治療、専門家の育成、トラウマインフォームド・ケアの普及活動の拠点となる。

(2)活用・展開：拠点については、全ての暴力被害は救命救急・災害に関連していることやパンデミックの影響を考慮すると、なごみに近い災害センターとの併設が望ましい。自治体では南海トラフ地震に備えて具体的に計画が進んでいるようなので、政策に反映できるような活動を開始している。

NFHCC で研修や治療セラピーについて県や市からの委託を受けることは継続的に活動を支える資金源につながる。NFHCC のセラピーグループは現在 10 名程度であるが、登録制にしてさらにセラピストを確保する。

成果：既存のなごみデータから、社会経済的影響および COVID の影響を把握でき、今後のデータ収集の方向性が示唆された。

(1)内容：フラッシュバック、リストカット、自殺念慮、自殺企図、PTSD、再被害が性暴力被害と関連するキーワード。

(2)活用・展開：経済的なマイナスのインパクトについては、これら人口中の被害者の割合となごみのデータを合わせて推計することで、社会で発生している経済的ロスを示すことができる。

推計するために必要な項目として、欠勤率、欠勤頻度、所得は必須。賃金センサス、大卒中退の賃金格差といった客観的な情報を追加する。不登校や欠勤の理由、キャリアにどのような影響があったかを自由記述も含めて具体的に聞く、さらに、あらたに NHK との協働で、同様の項目で NHK アンケート調査を実施することで、隠れている性暴力被害者のデータを加える。これらの項目を愛知県内から全国レベルへと拡大していくことで一貫したデータを収集・蓄積し分析を深める。

(3)その他:COVID19 の影響を受けた 2019 年と前後の年の比較で、大学生以下の子どもが家庭内で被害に遭っていること、SNS の被害が増えたこと、DV 被害者が、外部に助けを求められない状況が浮かび上がった。

成果：共有シートの作成とウェブベースの記録システムの整備ができた。

(1) 内容：「なごみ」と名古屋中央児相との連携に焦点を当てつつ、導入が容易な紙面ベースでの明確化を目指した。ワ―キンググループを通して、様々なシナリオで必要となる情報を洗い出してからめた情報共有シートを作成した。将来的にはウェブベースとすることで、安全な経路を通じた組織間運用が可能になる

(2) 活用・展開：作成したプロトコルを、「なごみ」-中央児相の間だけでは無く、名古屋における他組織へも広げて、連携に必要な情報や、情報の流れ、連携要求を明確化する。明確になった情報を元に、組織間連携スキームと、それを補助するシステムを構築する。確立された「明確化プロトコル」「組織間連携スキーム」「連携補助システム」を、全国の同様の取り組みを実施している箇所へ展開する。

４．　研究開発の実施体制

４－１．研究開発実施体制

・４－１－１

（１）研究者グループ

グループリーダー：長江美代子（日本福祉大学、教授）

役割:研究グループは本プロジェクトの目標達成に向けて、なごみグループによる日々の性暴力救援活動に関わり、データサイエンス支援グループにより作成開発されたデータベースや応用プログラムを実践に乗せ、データ連携を確実に実現できるように、計画を練り、対話を通して評価修正していく。

概要：研究代表者は、毎週「なごみ」で PTSD の予防・治療・回復に関わる側面を担当している。また、なごみに関わるスタッフの研修ついても、研究者グループが企画実施している。研究グループは、技術シーズ PE の開発者（Edna B. Foa）、PE の導入者（小西聖子）、心理教育アプリケーション開発者（今野理恵子）、SANE プログラムの導入者であり学会認定を進めている研究者（加納尚美）で構成している。

（２）なごみグループ

グループリーダー：片岡笑美子（一般社団法人日本フォレンジックヒューマンケアセンター、会長）

役割：愛知県との協働により、性暴力被害者支援看護師（SANE)を配置した病院拠点型ワンストップ支援センターを複数開設し、なごみをハブとしてモデル化し、他地域へと展開していく。

概要：主に、拠点病院のスタッフと、医療・司法。行政に関わるなごみ連携組織のメンバーで構成されている。MDT の主要メンバーを含む。

（３）データサイエンス支援グループ

グループリーダー：間瀬健二（名古屋大学、教授）

役割：なごみを中心に構築された地域内のステークホルダーとのネットワークと協働し､データベースや応用プログラムを作成設計する｡研究グループとともに OSC の活動データの標準化・蓄積・分析基盤を設計する。

概要：情報学研究科知能システム学専門家、労働経済学専門家、データマネジメントを含め、看護系の研究支援の経験が豊富な株式会社マイ. ビジネスサービスで構成されている。

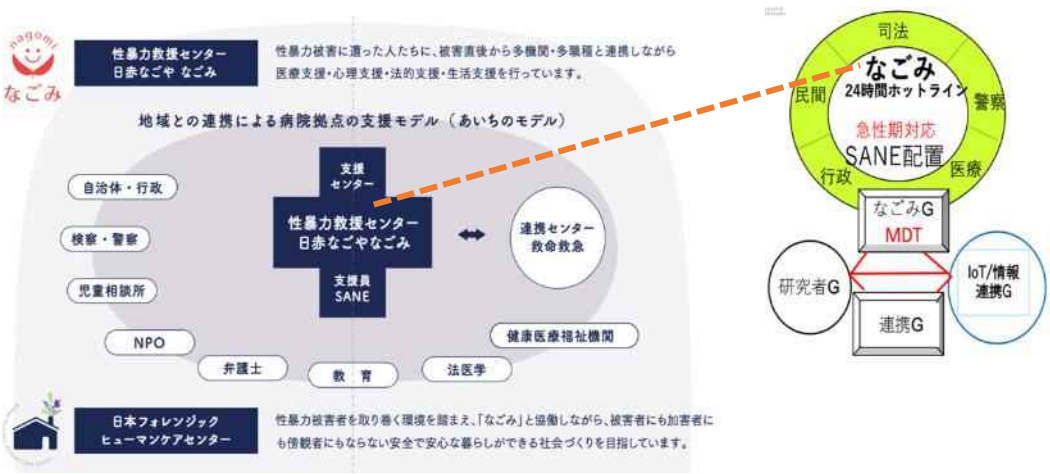
・４－１－２　協働実施者に期待された主な役割と、研究開発の実施に際して、実際に果たした役割、さらに、研究代表者と協働実施者との協働による主な成果

協働実施者は、「なごみチーム」のリーダーとして、なごみ運営の中心となり、OSC の拡大や自治体との連携や交渉に当たってきた。多職種多機関の運営推進会議のマネジメントや拠点病院との調整も全て協働実施者が行ってきている。その尽力により愛知県の事業との連携により、なごみ支援員の人件費や連携センター所属看護師の SANE 育成費用が補助されている。また現場において急性期モデルを実践的に整え、なごみの 5 年分のデータを分析できるように整理するなど果たしてきた役割は重要である。現在研究代表者と協働実施者は、NFHCC としての教育/啓発活動をしながら、なごみでの性暴力救援活動を継続している。トラウマ拠点の運営にもかかわり、人材育成として SANE、ISVA、虐待専門医（系統的全身診察ができる）、司法面接などの研修を事業化し定着させる。研究代表者は､NFHCC セラピーチームでトラウマケアと PTSD 治療を提供している｡また､NGM4S 救援システム効果を、身体的･精神的・社会的・経済的・法的アウトカムを設定して PDCA サイクルに乗せて発展させ、協働実施者とともにさらに全国へと拡充していく。

・４－１－３　協働上の課題

マンパワーの不足から、事務局業務が滞っている。

・４－１－４　事業終了時点でのステークホルダーマップ



４－２．研究開発実施者

(1) 研究グループ、なごみグループ（リーダー氏名：長江美代子／片岡笑美子）

役割：研究計画、実施、全体の統括／OSC 推進

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
長江美代子	ナガエミヨコ	日本福祉大学	看護学研究科	教授
片岡笑美子	カタオカエミコ	一般社団法人日本フォレンジックヒューマンケアセンター		会長
小西聖子	コニシタカコ	武蔵野大学	人間科学部大学院	教授
Edna Foa	エドナ　フォア	University of Pennsylvania	Center for the Treatment and Study of Anxiety	教授
田中敦子	タナカアツコ	日本福祉大学	看護学部看護学科	助教
平松絃子	ヒラマツヒロコ			RA

(2) データ・サイエンスグループ（リーダー氏名：間瀬健二）

役割：活動データの標準化・蓄積・分析、プログラム設計と開発

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
間瀬健二	マセ　ケンジ	名古屋大学	大学院情報学研究科	教授
榎堀優	エノキボリユウ	名古屋大学	大学院情報学研究科	助教
大沢真知子	オオサワマチコ	日本女子大学	人間社会学部現代社会学科	教授
髙岡昂太	タカオカコウタ	株式会社 AiCAN		CTO
林直美	ハヤシナオミ	株式会社マイ.ビジネスサービス		副社長
加藤寛貴	カトウヒロキ	名古屋大学	大学院情報学研究科	研究補助者

４－３．研究開発の協力者

氏　名	フリガナ	所　属	役職（身分）	協力内容
加納尚美	カノウナオミ	茨城県立医療大学	教授	SANE の認定制度
今野理恵子	コンノリエコ	武蔵野大学心理臨床センター		SARA(アプリ）開発者、SANE 研修
加藤秀章	カトウヒデアキ	名古屋市立大学法医学	准教授	MDT メンバー（法的アセスメント、司法関連）

犬飼千絵子	イヌカイチエコ	犬飼法律事務所		MDT メンバー弁護士
粕田陽子	カスダヨウコ	薫風法律事務所		MDT メンバー弁護士
外ノ池隆史	トノイケタカシ	愛知学院	教授	精神科医として PTSD 治療
土田幸子	ツチダサチコ	鈴鹿医療科学大学	准教授	セラピストメンバー
服部希恵	ハットリキエ	日本福祉大学看護実践研究センター	客員研究所員	研修・セラピー実施、研究データ収集と分析
古澤亜矢子	フルザワアヤコ	日本福祉大学看護学部	准教授	研修・セラピー実施、研究データ収集と分析
羽田有紀	ハダユキ	日本福祉大学看護学部	助教	研修・セラピー実施、研究データ収集と分析
館理江	タチリエ	日本福祉大学看護実践研究センター	客員研究所員	研修・セラピー実施、研究データ収集と分析
野口善令	ノグチヨシノリ	豊田地域医療センター総合診療科	教育顧問	医療、なごみ連携
山室理	ヤマムロオサム	日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院	副院長	なごみ運営と医療、MDT メンバー
加藤紀子	カトウノリコ	名古屋第二赤十字病院	産婦人科部長	なごみ運営と医療、MDT メンバー
坂本理恵	サカモトリエ	名古屋第二赤十字病院	医療社会事業係長	なごみ運営と活動、MDT メンバー
竹内浩	タケウチヒロシ	名古屋第二赤十字病院	精神科部長	医療、MDT メンバー
石井睦夫	イシイムツオ	名古屋第二赤十字病院	第一小児科部長	医療、MDT メンバー
山田浩史	ヤマダヒロシ	名古屋第二赤十字病院	第一泌尿器科部長	医療、MDT メンバー、SANE 教育
吉岡慎吾	ヨシオカシンゴ	独立行政法人国立病院機構東尾張病院	副院長	PTSD 治療、なごみとの連携、MDT メンバー
古橋功一	フルハシコウイチ	独立行政法人国立病院機構東尾張病院		PTSD 治療、なごみとの連携、MDT メンバー
新井康祥	アライヤスヒロ	楓の丘こどもと女性のクリニック	院長	PTSD 治療、なごみとの連携、MDT メンバー
加藤秀章	カトウヒデアキ	名古屋市立大学医学部法医学	准教授	なごみ運営、MDT メンバー、SANE 教育、
丸山洋子	マルヤマヨウコ	名古屋市中央児童相談所	精神科医師	医療、MDT メンバー
小笠原和美	オガサワラカズミ	慶應義塾大学	慶應義塾大学総合政策部	教授
渡邊勝徳	ワタナベカツノリ	愛知県　防災安全局県民安全課	課長	愛知県、なごみとの連携、MDT メンバー
稲葉隆司	イナバタカシ	名古屋市中央児童相談所	所長	なごみとの連携

原　恵	ハラメグミ	内閣府男女共同参画局 男女間暴力対策課	係長	全国展開への連携

機関名	部　署	協力内容
日本福祉大学	看護学部看護学科看護実践研究センター	研究総括、多機関との連携、セラピーの実施
日本福祉大学	福祉総合研修センター	SANE その他の研修実施とシンポジウム開催サポート
ニホン赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院	性暴力救援センター日赤なごや「なごみ」	社会貢献として OSC 拠点、「なごみ」設置
名古屋大学	大学院情報学研究科知能システム学専攻	データサイエンスチームとして研究活動を実施
一般社団法人日本フォレンジックヒューマンケアセンター（NFHCC）		OSC なごみの活動運営と多機関との連携
名古屋市児童相談所	中央児童相談所	MDT チーム構成の連携プロセス
武蔵野大学	大学院人間社会研究科心理臨床センター	技術シーズ（PE）の研修、実施、治療の協働
一般社団法人日本フォレンジック看護学会（JAFN）		SANE-J として学会認定し、専門職としての質の保証と社会への周知
独立行政法人国立病院機構東尾張病院		なごみとの連携による PTSD 治療
楓の丘こどもと女性のクリニック		なごみとの連携による児童精神科治療
愛知県精神医療センター		なごみとの連携による PTSD 治療
愛知県	防災安全局県民安全課	性暴力・性犯罪被害者支援として連携

５．　研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

https://nfhcc.jp/

５－１．シンポジウム等

５―１―１．プロジェクトで主催したイベント（シンポジウム・ワークショップなど）

年月日	名　称	場　所	概要・反響など	参加人数
2020/2/8	特別講義：救命救急における性暴力・DV・虐待対応の重要性と SANE の役割 （主催：なごみ NFHCC、ネブラスカ大学）	日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院	①絞頚　：アセスメントと創傷の同定 ②人身取引：被害の同定と医療従事者の役割 ③米国の性暴力被害者支援看護職（SANE)プログラム **Amy Mead,** MBA, BSN, RN, CEN SANE, Nurse Manager	32 名 SANE 修了生
2020/2/8	シンポジウム：救命救急部門とネブラスカ大学の SANE プログラムの概要 （主催：なごみ NFHCC、ネブラスカ大学）	日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院	救命救急における性暴力・DV・虐待対応の重要性と SANE の活動について研修およびシンポジウム。 **Amy Mead,** MBA, BSN, RN, CEN SANE, Nurse Manager **Wesley Zeger**, DO Associate Professor & Executive Vice Chair **Thang Nguyen**, MSN, APRN Faculty Instructor	一般、病院スタッフ
2021/5/29	性暴力撲滅に向けてエビデンスを蓄積する (共催：日本福祉大学，（一社）日本フォレンジックヒューマンケアセンター)	ウェビナー	・NGM4S プロジェクトの概要とこれまでの経過（長江） ・性暴力撲滅にむけての日本の主要な課題と提示していくエビデンス（小西） ・病院拠点型ワンストップ支援センターにおける早期介入と情報共有の意義（片岡） ・NGM4S の情報基盤構築に向けて（間瀬、榎堀）	96 名参加、回答 34 名 健康・医療・福祉分野で、80%以上が女性 82%が「満足～とても満足」、77%が「自身の取り組みに役立つ～とても役立つ」
2021/9/26	ISVA 日本ワークショップ ～イギリスに学ぶ性暴力被害者支援～ （主催：日本福祉大学、 共催：ISVA Japan プロジェクトチーム、 後援：内閣府、 協力：一般社団法人 日本フォレンジックヒュ	ウェビナー	**Alison Eaton 氏** 英国の警察に 30 年勤務した、元 senior police officer。内務省で ISVA 資格の発展のサポートをしており、ISVA トレーニングを提供している。また英国大使館と共に、性暴力・性犯罪被害者のためのワンストップ支援センター創設と発展に寄与している。	参加者 115 名中 70 名回答。71%(50 名)がとても満足と回答した。自由記述欄には、「ISVA の活動、役割、意義について知ることができた」、「警察や裁判所等との連携が素晴らしいと思っ

	ーマンケアセンター（NFHCC）、在日英国大使館、日本福祉大学社会福祉総合研修センター）		Ceri Fowler 氏 心理学のバックグラウンドをもつ経験豊富な ISVA。英国の警察学校などでもトレーニングを実施してきた。Eaton 氏と共に、英国での ISVA トレーニングや、第一線の警察官に対するトレーニングを開発し、実施してきた。	た」、など多くのコメントがよせられた

５－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

５―２―１．書籍、フリーペーパー、DVD など論文以外に発行したもの

(1) なごみ 5 周年記念誌　性暴力救援センター日赤なごやなごみ　2020 年 5 月

(2) 翻訳:長江美代子訳.(2020).第 9 章暴力:性的暴行とフォレンジック看護師(201-256), Constantino, R. E., Crane, A. P., & Young, S. E. (2013), Forensic Nursing: Evidenced-based principles and practice（フォレンジック看護ハンドブック: 法と医療の領域で協働実践、柳井圭子監訳). 東京: 福村出版.

(3) 長江美代子： DV 被害者支援における看護の役割、こころの科学(219),53-59,2021.

(4) 長江美代子：11 章性暴力被害裁判とポリヴェーガル理論(217-233)、なぜ私は凍りついたのか、春秋社, 2021.

(5) 片岡笑美子:第 2 章病院拠点型ワンストップ支援センターにおける司法面接とケア(21-40)、児童虐待における司法面接と子ども支援,2021.

５―２―２．ウェブメディアの開設・運営

(1) 一般社団法人日本フォレンジックヒューマンケアセンター（NFHCC）
https://nfhcc.jp/　（2020 年 5 月　随時更新）

(2) SANE 紹介ビデオを作成し、HP にアップした。https://nfhcc.jp/?page_id=28
（2020 年 6 月）

５―２―３．学会以外のシンポジウムなどでの招へい講演　など

(1) 名古屋市委託事業サポートセンターあいち、なごや人権啓発センターソレイユプラザなごや研修室：性暴力被害の理解と対応　大切な子どものからだとこころを守ろう（2019 年 11 月 6 日）

(2) 名古屋市司法書士会　名古屋司法書士会館：性暴力被害の実態と急性期対応（2019 年 11 月 14 日）

(3) 豊田市性暴力被害防止セミナー、豊田市保見交流館：身近におきる性暴力　大切なからだとこころを守ろう（2019 年 11 月 23 日）

(4) 名古屋西保健センター、名古屋西高等学校：思春期セミナー　デート DV と人権　性暴力救援センター日赤なごやなごみの活動を通じて（2019 年 11 月 29 日）

(5) 日本福祉大学社会福祉学部　日本福祉大学美浜キャンパス：性暴力被害の実態と急性期対応（2019 年 12 月 4 日）

(6) サポートセンターあいち　サポートセンターあいち本部：性暴力被害者に対するなごみでの支援の実際　－サポートあいちとのよりよい連携を考える－

(7) 京都産業大学　京都ガーデンパレス：シンポジウム（社会安全・警察額研究所）性暴力被害者のために何が必要か、何ができるか(2020 年 2 月 17 日)
(8) 内閣府山口県主催ライブ配信シンポジウム、性暴力救援センター日赤なごやなごみの現状と課題、2020年11月25日、政府広報オンライン

５－３．論文発表

５―３―１．査読付き（　0　件）

５―３―２．査読なし（　2　件）

(1) 長江美代子、性暴力被害者のトラウマ、司法精神医学、15(1), 36-41, 2020.
(2) 長江美代子、米山奈奈子, 性暴力被害者の看護支援：ワンストップ支援ワンストップ支援センターの活動とトラウマケアの重要性、精神科看護 48(13), 50-61,2021.

５－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

５―４―１．招待講演（国内会議　2　件、国際会議　0　件）

(1)片岡笑美子(一社)日本フォレンジックヒューマンケアセンター）、長江美代子（日本福祉大学）：市民公開シンポジウム「市民公開シンポジウム「安全な地域と社会を創る」、第7回日本フォレンジック看護学会学術集会、オンライン開催、（2020年8月29日）
(2)長江美代子(日本福祉大学）:ワンストップ支援センターの活動とトラウマケアの重要性、第 28 回日本精神科看護専門学術集会、オンライン開催、（2021 年 10 月 17 日）

５―４―２．口頭発表（国内会議　1　件、国際会議　0　件）

(1) 間瀬健二（名古屋大学）：性暴力撲滅に向けた早期介入とPTSD予防のための情報連携基盤構築に向けて、令和二年度 電気・電子・情報関係学会 東海支部連合大会、オンライン開催、（2020年9月4-5日）

５―４―３．ポスター発表（国内会議　1　件、国際会議　0　件）

(1) 長江美代子（日本福祉大学）：救命救急における性暴力・DV・虐待対応の重要性と性暴力被害者支援看護師（SANE）の活動、第48回日本救急医学会学術集会、オンライン開催、（2020年11月18-20日）

５－５．新聞報道・投稿、受賞など

５―５―１．新聞報道・投稿

(1) 中日新聞（2019 年 12 月 4 日）性暴力被害者ケアの現状　　名古屋大で講演会　支援者ら報告、HeForShe　特別セミナー、「日本における性暴力被害者救援の現状とトラウマケア」

(2) 日本経済新聞（2019 年 12 月 18 日）養父に懲役 7 年の判決　津地裁監護者性交「常習性も」家庭内性暴力　周りがきづくには
(3) 中日新聞（2020 年 2 月 5 日）性被害　増える相談　16～18 年　中部の支援センター
(4) 朝日新聞(2020 年 2 月 18 日)性暴力被害者支援　課題探る　上京でシンポジウム　若年層に積極的にかかわらなければ
(5) 朝日新聞（2020 年 2 月 27 日）セカンドレイプ断つには　性被害者　周囲の言動で受ける二次被害「絶望し､誰にも話せなくなる」
(6) 毎日新聞（2020 年 3 月 7 日）声をつないで　国際女性デー2020、話してくれてありがとう　早期に適切な処置必要
(7) 朝日新聞（2020 年 3 月 9 日）抵抗できない状態　争点　娘に性的暴行　12 日控訴審判決、「抗拒不能」　専門家は「法律、被害者に不利」「男性目線の考え方」
(8) 朝日新聞（2020年4月6日）性暴力の被害者ケア　専門の看護師育てる　学会が資格認定制度　試験実施へ
(9) 日本経済新聞夕刊（2020年9月25日）つらい性被害　支援の輪
(10)朝日新聞（2020年9月29日）子の性被害を知った保護者のケア
(11)朝日DIGITAL新聞（2021年7月12）性暴力の前にたくみにつけ込む忍び寄る「グルーミング」

５―５―２．受賞

(1)中京テレビ（2020 年 5 月 25 日）ドキュメンタリー「がらくた」、日本民間放送連盟賞の報道部門「最優秀賞」

５―５―３．その他

(1) NHK　クローズアップ現代プラス放映「まさか家族が性暴力に　身近に潜む性暴力」（2019 年 11 月 27 日）NHK 名古屋まるっと／おはよう東海「子どもを被害から守るには」にて活動内容を放映（2020 年１月 15 日／１月 24 日）
(2) NHK　おはよう日本　おはよう東海で放映されたものを一部変更して（2020 年 4 月 22 日）NHK　おはよう日本まるっと！「#8891」の案内」（2020 年 10 月 6 日）
(3) 名古屋テレビ（メーテレ）　アップ　性犯罪…被害者家族が抱える PTSD（2021 年 2 月 16 日）
(4) NHK(広島）ハートネット TV 「　性暴力被害　トラウマからの回復の道筋を探る」（2021 年 11 月 16 日/11 月 23 日）

５－６．特許出願

５―６―１．国内出願（　0　件）

５―６―２．海外出願（　0　件）

６．その他（任意）

なし